

Title	女形のいる風景：第二次世界大戦中の日本兵戦争捕虜収容所の日常と「男らしさ」の脱構築
Author(s)	山田 真美
Citation	人間文化創成科学論叢
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10083/52849
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-11-19T12:31:08Z



Ochanomizu University

女形のいる風景

— 第二次世界大戦中の日本兵戦争捕虜収容所の日常と「男らしさ」の脱構築 —

山 田 真 美

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

女形のいる風景

—第二次世界大戦中の日本兵戦争捕虜収容所の日常と「男らしさ」の脱構築—

山田真美*

A Scene with Female Roles: Daily Life in Prison Camps for Japanese Soldiers during World War II and the Deconstruction of “Masculinity”

YAMADA Mami

Abstract

Through most of human history, war has been the domain of men and has been narrated by men. In Japan during World War II, there was a military code called “*Senjinkun*” which taught that it was a shame for a soldier to be captured by his enemy and that he had to die for the sake of his honor. The code was widely followed and believed yet the daily lives and emotional state of Japanese prisoners of war (POWs) has not been adequately studied. This paper focuses on the survivors of the Cowra Breakout, a massive and suicidal uprising by approximately 1,000 Japanese POWs on August 5, 1944 at Cowra Internment and Prisoner of War Camp, Australia, looking first at how daily life at the POW camp challenged and changed men who had previously lived with daily violence in the homosocial military. Then, how playing a female role (*Onnagata*) in camp theater performances became a symbolic event is explained, which was a form of initiation and an important step allowing prisoners to free themselves from their previous values and the mind control of the narrow definition of “masculinity”.

Key words: Cowra Breakout, World War II (WW2), Prisoner of War (POW), Homosocial, *Onnagata* (Actor of Female Roles)

1. はじめに

戦争はこれまで男のものとして、もっぱら男たちによって語られてきた。日本では1873年（明治6年）から1945年（昭和20年）までの72年間にわたって男子の徴兵が義務づけられ、「国民皆兵」の実態は即ち「男子皆兵」であった。政府は1931年（昭和6年）に「銃後の守り」としての大日本国防婦人会を結成したが、女性の政治活動は禁止している（上野 1998: 31-33）。20世紀の言説によれば、攻撃は人間の「本能」であり、戦争はその自然な「発露」とされた（若桑 2005: 24）。そうした言説のもと、戦争に伴う暴力と死は肯定的に描かれたが、兵の日常が描かれることは少なかった。殊に「生きて虜囚の辱めを受けず」で知られる『戦陣訓』の教えが広く流布した日本においては、敵の捕虜となった者たちの日常や心の動きに関しては未だ語られていない部分が多い¹。本稿では1944年（昭和19年）8月5日に約1,000人の日本人捕虜が引き起こした集団自決的な暴動（カウラ事件）の舞台となったカウラ第十二戦争捕虜収容所Bコンパウンド（以下、Bコンパウンド）に目を向け、その日常生

キーワード：カウラ事件、第二次世界大戦、戦争捕虜、ホモソーシャル、女形

*平成23年度生 ジェンダー学際研究専攻

活の一端を、複数の元捕虜が「楽しかった」と述懐した演芸会と、そこで人気を博した「女形（おんながた）」の存在に焦点を当てながら記述する。その上で、「兵」から「捕虜」へと立場が変わるにつれて変容していった彼らの「男らしさ」の観念と、ホモソーシャルな男性共同体の在り方について考察したい。

2. 日本人の捕虜観と男らしさの構築

第二次世界大戦当時の日本では敵の捕虜となることが著しく忌み嫌われた。その際、しばしば引き合いに出されたものは「生きて虜囚の辱めを受けず」で知られる『戦陣訓』の教えである。『戦陣訓』が発表された1941年（昭和16年）1月8日、新聞各紙はこぞって全文を紹介した。国民学校の高学年朝会や学級朝会では「生きて虜囚の辱めを受けず」が児童の頭に刷り込まれ（戸田 2012: 114）、中学校では軍歌演習の授業中に「戦陣訓の歌」が教えられるようになった（加藤・細谷 2009: 308）。『戦陣訓』は陸軍兵士に行動規範を知らしめる目的で示達された文書であったが、実際には日本国民全体に甚大な影響力を持ったと言える。その規範は捕虜たちの「観念の全てを支配」し、捕虜たちの未来に残されたものは「死」のみであった（中田 2010: 78-79）。捕虜となることを忌み嫌う風潮は多くの自決者を出した。サイパン島では31,000人の日本兵と子どもを含む5,000人の日本人が、グアム島では18,000人の日本兵が、硫黄島では19,000人の日本兵が玉砕した。インパール作戦の師団長は「万一捕虜になる恐れがある時は自決すべし。自決者は戦死者として取り扱う」と訓示した。戦死者は靖国神社に祀られる。よく知られた「靖国で会おう」の合言葉は、「捕虜にはならない、なれないことの別の表現」でもあった（内海 2005: 485-486）。

軍隊における男たちのホモソーシャルな絆は、単なる「絆」を超えて、むしろ「決定的に重要な男性のホモソーシャルな絆」（セジウィック 2001: 29）と呼ぶべき強固なつながりであった。そこでは「男らしさ」が必須の前提であり、暴力が介在した。ことに日本軍には「命のやりとりをする組織の秩序は暴力を使わねば維持できない」との考えがあり、私的制裁と呼ばれる暴力行為が広く横行した（一ノ瀬 2009: 82）。

カウラ事件関係者の一人、陸軍出身のT氏は、古年兵から初年兵に対して毎晩のように行なわれた私的制裁の激しさを次のように語った。「気合いを入れる。手で殴るんです。最初は平手で。ところがねえ、鼓膜破ることが、ようあるんですわ。平手でペーンと来るから。それで、ある時、私の同年兵が鼓膜破けて、医局へ診察に行っただんです。医局の将校、軍医さんですな、耳に入って。『そこの中隊は、この鼓膜を破るほどのことをしちゃいけないでねえか』とゆう注意事項があつて。それから拳骨に代わったんです」

海軍出身のH氏は「海軍に入れば世界中に行ける」と夢見ていたが、現実は大きく違っていたという。「海軍の日常生活は、そんな甘いもんじゃないの。軍人精神注入棒といってね（中略）、痛いどころじゃないの。みんな切れてねえ、大騒ぎになる。いやあ、それこそ絶えそうになる。倒れるんだもん。四つん這いにしてやられる（両手で持った棒で臀部を思いきり殴る仕草）。それか、立ってればねえ、『手を上げー！足を開けー！』それで、ダーン！ええ。ひっくり返る。そうするとねえ、あの一、海水を汲んできて、ぶっかけて。失神したの、また戻して、またやるの。ええ、それこそひどい。だからあの一、もう、気の弱い人は（そっと首に手をかけるポーズ）自殺する人も。海の中へ飛び込んで帰って来ないのもいるの。そのぐらいしないと、戦争にね、あの一、いよいよ撃ち合って、その、最前線にいる兵隊が使い物にならないって」

日本軍というホモソーシャルな男性共同体は、徹底的な身体的暴力の授受によって培われたものであった。捕虜には絶対にならない・なれないという教えは、暴力によって規制され、やがて深く身体化して行ったものと思われる。

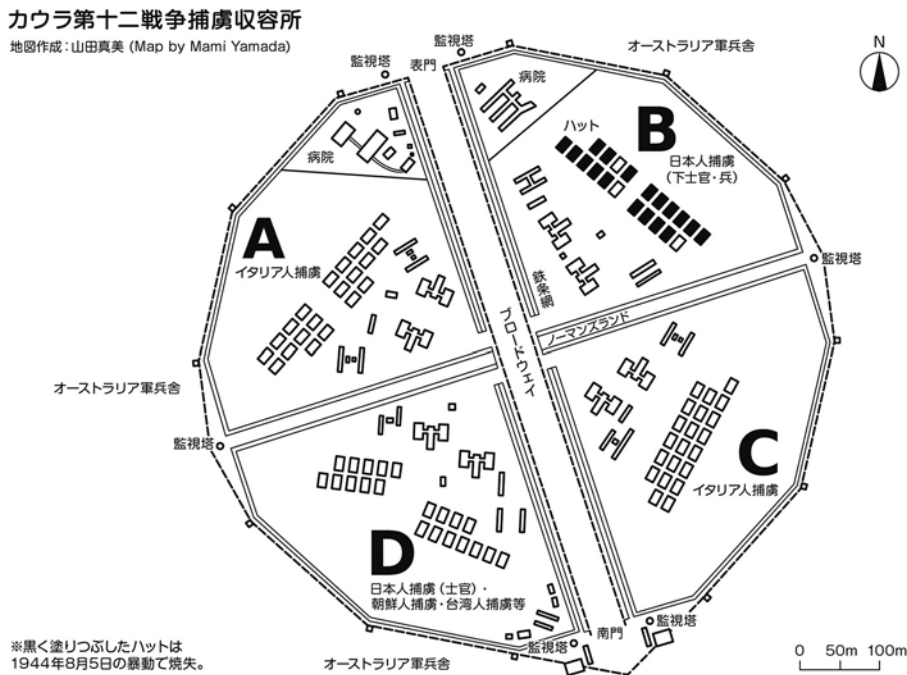
軍隊という共同体を維持するためには、ミソジニーも不可欠であった。生身の女性が軍隊から排除されたことは言うに及ばず、女性特有の病気と考えられていたヒステリー（戦争神経症）や女性的な感情までを悉く軍隊から排除しようとする試みがなされた（中村 2010: 184-185）。その上で日本軍は、みずからの肉体を国家のために捧げて死んだ「爆弾三勇士」を男らしさの究極の理想形として推奨した。男らしさの反対は「女のような男」であり「非国民」であった。「女のような男」「非国民」のレッテルを貼られることは、男同士が互いに規定し合った「男らしさ」の境界線から逸脱することへの恐怖を意味した（内田 2010: 187）。こうした価値観が支配する中で、敵の捕虜となった日本人は『戦陣訓』とジェンダー規範の二重の意味で日本社会の規範から逸脱した存在

と言える。このような捕虜たちが、捕虜収容所の中で長期にわたり集団生活を送る中で、そこにどのような日常が現出し、どのような「男らしさ」の変容と葛藤がもたらされたのか。本稿ではその一端を描いてみたい。

3. カウラ事件とカウラ第十二戦争捕虜収容所

3-1. カウラ事件の概要

第二次世界大戦期、日本軍は捕虜の存在を一切認めなかった。そのため日本人捕虜に関する正確な統計は存在しない（山本 2001a: 18）。しかし実際にはオーストラリア国内に収容された日本人捕虜だけでも1944年（昭和19年）8月現在で2,223人に達し、その内1,104人の下士官と兵がBコンパウンドに収容されていた。これは当初オーストラリア側が想定した定員の2倍強に相当する（Department of Defence 1996: Chapter 1-4）。Bコンパウンドの捕虜たちが大規模な脱走を計画しているとの情報を朝鮮人密告者から得たオーストラリア軍は、日本人捕虜のうち下士官だけをカウラに残し、兵を分離して同じニュー・サウス・ウェールズ州内のヘイ収容所に同月7日に移送することを決めた。分離命令は8月4日、日本人捕虜団長らに対して通達された（Australian War Memorial HP）。命令を受けた団長らは「下士官・兵の分離は、わが国家家族制度の破壊にひとしい悲劇である」と主張、階級による分離を見合わせるようオーストラリア側に申し入れたが受け入れられなかった（森木 1986: 181, Gordon 1994: 120）。この事態を受け、Bコンパウンドの捕虜全員によって「戦死を前提とした突撃」を決行するか否かの多数決（〇×式無記名投票）が行なわれた。開票の結果、約80%が突撃賛成（死）を意味する「〇」を投じたため、その夜の出撃が決まった（高原 1987: 174-175）。8月5日早朝2時頃、Bコンパウンド内で突撃ラッパが鳴り響き、ナイフやバット等を手にした日本人捕虜らが次々に鉄条網を乗り越えた。これを阻止すべくオーストラリア軍の番兵らが発砲を開始した。1,104人の捕虜のうち588人は鉄条網を乗り越えてブロードウェイまで進み、378人は収容所の敷地外に脱走し最長で9日間にわたる逃亡生活を続けた。残る138人はそのままBコンパウンド内に留まった。一連の暴動で231人の日本人と4人のオーストラリア兵が死亡し、日本人108人と4人のオーストラリア兵が負傷。後日さらに3人の日本人と1人のオーストラリア兵が死亡した（National Archives of Australia HP）。暴動時に焼かれたハットのほかフェンス等も損失し、被害総額は約39,800ドル（約19,900ポンド）に達した（Marriott 1988: 248）。



図：カウラ第十二戦争捕虜収容所見取り図（筆者作製）

3-2. カウラ第十二戦争捕虜収容所Bコンパウンドという場所とその日常

オーストラリア政府は日本人捕虜を写真に収めることを厳しく制限した (Department of Defence 1996: Chapter 12-21)。野球や相撲に興じる大勢の日本人を遠くから撮影したスナップを除けば、彼らの日常を写真資料から窺い知ることは難しい。ここでは主に戦争捕虜と民間人抑留者の扱いに関する取り決めにまとめた“Directorate of Prisoners of War and Internees 1939-51”と元捕虜の高原希國による自伝『カウラ物語』²を手がかりにBコンパウンドの日常風景の再現を試みたい。カウラ第十二戦争捕虜収容所は第二次大戦中にオーストラリア全土に28か所あった主要な戦争捕虜収容所の1つで、1941年(昭和16年)に開所された当時の主目的はイタリア人捕虜の収容にあった (Cowra Council HP)。カウラはシドニーの真西約300キロメートルに位置し、1940年代の人口は約3,000人 (Hobson)。収容所の敷地は端から端まで約686メートルあり、中央で直角に交わる2本の道路によってA・B・C・Dの4コンパウンドに分割された。各コンパウンドの面積は約69,000平方メートルであった。事件当時、Bコンパウンドには日本人下士官と兵、A・Cコンパウンドにはイタリア人、Dコンパウンドには日本人士官・朝鮮人・台湾人等が収容された (Department of Defence 1996: Chapter 21)。

捕虜たちは「ハット」と呼ばれる切妻造りの平屋建て兵舎に暮らした。屋根はスレート葺きで、トタンの壁には窓が付いていた。ハットはトタン板で2部屋に分割され、部屋は班ごとに使用された。暴動発生時には21棟のハットがあったと記録されていることから、班は全部で42班、1班の平均人数は26人強であったと考えられる。床は板張りで、日本人は室内では靴を脱ぎ日本式に暮らした。ベッドで寝起きたイタリア人とは対照的に、日本人は麦藁を詰めたマットレスで眠り、朝になるとそれを三つ折りにして片づけた。捕虜の制服はオーストラリア軍の軍服(古着)を赤く染めた代物で、背中には捕虜を意味するPOWまたはPWの文字が刻まれた。当時の日本では手に入りにくい上等な羊毛品だった捕虜服を、戦後日本に持ち帰り、黒く染め直して長く愛用した者もいる(元捕虜T氏談)。革靴が支給されたが、多くの日本人は手製の下駄を好んで履いた。朝食はパンに紅茶、昼食は一皿料理。夕食は肉と野菜のほか日本人には米と魚も支給された。午前と午後のティータイムにはケーキも供された。炊事当番は日本人自身が務めた。物資は豊富で、捕虜たちは野球場にラインを引く際、石灰代わりにメリケン粉を用いた。水洗トイレやシャワー室もあった。コンパウンドの横には病院があり、必要があれば毎日診察を受けることが出来た。日本人には労働が課せられず、捕虜たちは野球や麻雀等に興じて日々を過ごした。1人当たり1日5本配給されたタバコはしばしば通貨代わりに使用された。彼らが白米からドブロクを密造して楽しんだことも証言から明らかである。収容所生活は「天国のよう」(高原 1987: 150, 164, 166)であったが、その先に「死」以外を想起できない日本人捕虜たちにとっては葛藤を与えるものであったと想像される。捕虜たちは花札や賭け麻雀で憂さを晴らし、野球や相撲でストレスを解消した。捕虜が増えるにつれて以前から仲の悪かった陸軍と海軍の不仲が改めて浮き彫りになり、みずからを権威づけるために『戦陣訓』等を持ち出して軍人意識を高める者も次第に現われ始めた(高原 1987: 165-167)。

4. 捕虜収容所と「女形」

4-1. 捕虜たちの共通の記憶としての「女形」

以下では複数の元捕虜たちが「楽しかった」と回想する「演芸会」と、その中でもひととき人気があったとされる「女形」の存在に注目し、捕虜たちの行動と心理状態について考察する。1993年(平成5年)以来、筆者はカウラ事件を生き残った元捕虜たちへのインタビューを続けてきた。彼らの口から語られる言葉には多くの共通点があった。一例を挙げれば、軍隊の内務班における私的制裁が辛かったこと、戦地における飢餓の記憶、マラリアや南方性皮膚疾患の苦しみ、船が沈み何日も漂流した地獄の体験、傷病や飢餓のため抵抗できず捕虜になってしまった経緯、オーストラリアが捕虜を人道的に扱ったことへの感謝、カウラ事件当夜の様子(「一旦は死を覚悟して突撃したものの気がつくとき生きていた」と答えた者が多い)等。しかし、こうした血なまぐさいエピソードとは別に、元捕虜たちの口からはオーストラリア各地の収容所で演じられた「女形」にまつわる話題がしばしば飛び出した。暴力や死にまつわる陰惨な記憶が並ぶ中で、「女形」にまつわる記憶は極めて異質と言えるだろう。

4-2. オーストラリアの戦争捕虜収容所における「女形」

元捕虜の高原は自伝の中で、カウラで行なわれた演芸会には「立派な衣装を着けた女形が登場」し、「女性のいないキャンプでは、この女形が一番の人気」であったと述べている（高原, 1987: 206-207）。元捕虜のM氏によれば、カウラ収容所Bコンパウンドでは8月4日夜、「演芸会のために用意してあった大きなケーキ」が分配され食されたという。このことから日本人捕虜たちが暴動の直前まで演芸会を楽しみにしていた様子が窺える。一方、元陸軍少尉の松原俊二はカウラから約440km離れたマーチソン捕虜収容所での演芸会の様子を「海兵、陸士出身の20歳そこそこの若者が数人選ばれて女役にさせられた。白粉を顔に塗り、口紅をつけ、布に絵の具でデザインした和服を着せると驚くような美人になる。何しろ一年以上も日本女性を見てない人間には大変な感動である。（中略）この時以来、女形になった人に対して異常な感情をもつ人が現われ、同性愛的な事件に発展しそうなこともあったようである。面白いもので、一度女形をやると芝居が終っても、何となく異性を感じ、本人も当然それを意識するので余計に女性的な言動になる傾向があり、一層問題が複雑になる」とセクシャリティーの問題に踏み込んで記録している（松原 1989: 216-217）。「女形」は必ずしも若く美しい女性だけを演じたわけではなかった。前述のM氏によれば、Bコンパウンドには老婆役専門の「女形」も存在した。老け役で人気を博したその捕虜は普段の生活の中でも「婆さん」のあだ名で呼ばれたという。『暎の母』に代表される「母と息子の別離と再会の物語」は捕虜たちの間でとりわけ人気があった。母親役は重要な役どころであり、演芸会で老婆役を巧く演じることのできる役者は珍重された。

『米軍による日本兵捕虜写真集』には、ブリスベンの捕虜収容所で1944年（昭和19年）11月に撮影された貴重な2人の「女形」の写真が掲載されている。両者とも18~19歳と思われる初々しきで、大きく膨らませた髷（まげ）のかつらを被り、松や青海波等の日本的な絵柄が描かれた振袖の着物に、だらりの帯。1人は乙女のように片手で胸元を押さえる仕草をし、もう1人は見返り美人を思わせるポーズをとっている（山本 2001b: 100）。2人の表情は明るく弾んでおり、彼らが楽しみながら「女形」を演じていた様子が窺える³。

5. 「女形」を演じた元捕虜Y氏の回想

収容所の捕虜たちが「女形」を演じることにはどのような意味があったのだろうか。ここでは実際に捕虜収容所で「女形」を演じた経験を持つ元捕虜のY氏の体験談から、捕虜たちにとっての「女形」の意味を考察したい⁴。Y氏は1919年（大正8年）に西日本の小さな町で生まれた。家庭の事情で生後すぐ養子に出されたが、ほどなく養母とも生き別れた。1939年（昭和14年）に陸軍の工兵部隊に入営。1943年（昭和18年）3月、輸送船帝洋丸でラバウルに向けて航海中にダンピール海峡で被弾した。この時の階級は伍長（下士官）であった。一刻も早く船から脱出すべき危険な状況であったが、甲板上で死んだ6人の仲間の親指を切り落としてタオルに包み、遺骨として中隊長に託す冷徹さを失っていない。その後、5~6昼夜にわたり海上を漂流した。一緒に漂流した2人は洋上で「握り飯持って来ーい!」、「熱いお茶が欲しいなあ!」とそれぞれ叫んで海に沈んだ。Y氏も救命胴衣を脱いで死のうとしたが死にきれず、ポケットに残った鰹節を齧って生き延びた。その後、日本軍のボートに助けられ一命を取り留めたものの、ようやくたどり着いたグッドイナフ島には武装した敵兵が待ち受けていた。Y氏は素手で闘いを挑んだが、頭を殴られ気絶。気づいた時には捕虜になっていた。

ブリスベンの尋問所を経てカウラ収容所に到着し、他の日本人捕虜の姿を見たY氏は、「全員がここに揃ってると。生きるも死ぬも、またここで一緒だわい」と思い安堵したという。カウラでのY氏はひたすら野球と博打に明け暮れた。しかしカウラ事件が発生すると、「号令一下、首を吊って死ぬ」との班長の命令に従って「首を吊るための輪」を全班員のために速やかに作り始めている。その直後に首を吊って死ぬ案が中止になり、突撃ラッパで飛び出すことが決まると、Y氏は野球バットを手に取った。一緒に飛び出す仲間に「もし万一わしが、あの弾丸（たま）が当たって、とにかくその重傷を負ってどうにもこうにもならん時は、もう、この野球のバット持って頭あ一発ガンと、いっぺんに殴って殺してくれ」と、もしもの時の介錯を頼んでから突撃ラッパの合図とともに飛び出した。

筆者：弾丸が降りしきる場面などで、怖いと思うことはなかったんですか。

Y氏：ああ、それはなかったですなあ。当たればいいと思ってねえ、「当たれー！」っちゅうような気持ちで飛んでったですから。だからねえ、正直言ってねえ、どっか当たれば、一発で、イチコロでいけばいいなあ。だから「当たれー！」思って飛んで出たんですわ。

暴動の目的が「死」であったことは多くの元捕虜が証言している。ハットを飛び出したY氏は鉄条網のフェンスを2つ乗り越えたところで銃撃を受けたが、弾丸は彼ではなく野球バットに命中。バットは木っ端微塵に吹き飛んだ。さらにブロードウェイまで進んだところ、そこには伏せの姿勢をした日本人が溢れており、身動きすら難しい状況であった。進退窮まったY氏は、目の前にあった側溝めがけて飛び込んだ。溝の中で人心地つこうとタバコを吸ったところ煙めがけて銃撃された。Y氏は急いでタバコを揉み消した。

筆者：タバコを消したということは、その段階ではもう死にたくはないんですね。

Y氏：そんな時は撃たれたくはないですね、みんなもおろし。だんだん夜が明けるにしたがって「これで死ぬのも大変だなあ」とゆうような気持ちになっていましたねえ。

筆者：だんだん最初の目的から変わってきていますよね。

Y氏：変わってくるんですよええ。やっぱり気持ちがねえ、少しは変わってきますよね。

「みんなもいる」ことを知ったY氏の中で、死への執着はいつしか消えていた。野球バットが被弾した際に負傷した右の掌を除けば、Y氏はほぼ無傷のまま暴動を終えた。現在のY氏は生まれ育った町で妻と暮らしている。温厚・誠実な人柄で、地元での信望は厚い。記憶力も衰えておらず、質問には早口で淀みなく答える。自動車の運転が大好きで、筆者が訪ねた際にもみずからハンドルを握って駅に出迎えてくれた。大柄でがっしりした体躯は、かつて「女形」を演じた人とは到底思えない。

Y氏の回想にはしばしば「仕方がない」という言葉が混じった。幼少時の母との別れは「仕方がないこと」。爆弾三勇士のように命を投げ出さねばならない工兵の仕事も「やる時は仕方がないから」。上官に殴られたことも「そりゃあもう仕方がないですな」。カウラの暴動も「もう仕方がないわーっちゅうような気持ちで」。運命を諦めたかのような淡々とした語りが続いた。心の迷いや諦めを「仕方がない」とやり過ごし、流される日本的な性向（首藤，2008：17）が、日本軍という特異で強固なホモソーシャルな共同体を支えていたことは疑いようがない。しかしながら話がカウラ事件の後で移動させられたマーチソン第十三戦争捕虜収容所での「女形」の体験に及ぶと、それまで冷静な表情を保っていたY氏はにわかに相好を崩した。

Y氏：（カウラでは）野球やって博打やって遊んでばっかりしとったけんさあ、なんかないかなあって。ほいだら「おい、演芸部やらんかー」ゆうて。「ほんじゃ、やろうかー」と。

カウラからマーチソンに移ったY氏は「何か」を模索していた。そして人から勤められるままに演芸部に入った。しかし、なぜ演芸部だったのか。カウラでも演芸会は開かれていたが、Y氏は1度も見に行ったことがないという。その理由は、カウラ時代の友達が「まあ、いいやん、そんなもん見んでも。ほんで野球やったほうが面白いわ」と止めたからだ」とY氏は説明した。人から誘われたとはいえ、マーチソンではなぜ演芸部なのか。その理由を尋ねたところ、Y氏は初めて見せる晴れ晴れとした顔でおかしそうに笑い出した。

Y氏：見よう見まねでねえ、なんでもやったろかーゆうような気持ちだったんですよ。（中略）たまたま女形に。まあ「やってみんかー」「やれー」「これやれー」みたいなことで、よし、やったろかー。あっはっは。人間バカだから、なんでもやろうかーゆうて。

出生からカウラ事件までの四半世紀を語る時、Y氏は何かを諦めたような冷静な口調で「仕方がない」を連発した。その同じ人が、演芸部の思い出を語り始めた時、初めて喜怒哀楽を露わにした感があった。このことは演芸部に入ったY氏の中で何かが大きく変化したことを示唆しているのではないか。マーチソンで彼らが旗揚げし

た演芸部は、演劇の心得のある人々が多く集う、セミプロあるいはそれ以上のレベルの集団だったらしい。脚本家は明治大学演劇部の出身者で、彼は次々に新作を書き下ろした。当時の日本で名の知られた五月信子一座のメンバーもいた。電気技師や大工もおり、電気装置や大道具に意匠を凝らした。音楽家は公演のたびにオリジナル曲を作詞作曲した。ギターからマンドリン、三味線、ドラムまで全ての楽器を自分たちで手作りした。ギター製作担当の田村広は、後に世界的に名を馳せる「田村ギター」を創設することとなる。彼らはこの演芸部を「大和一座」と名付け、月に1度の公演を行なった。この環境の中で、Y氏はこれまでとは全く異なる体験を通じて新しい価値観を再構築していったと思われる。

Y氏：シナリオライターが1か月に1回ねえ、シナリオを書くんだがねえ、そのシナリオを見て役柄を決めて、そんでまあ、その人に合ったような役柄を決めて、ほいで今度は道具方がそれを全部（じえんぶ）、着物を、こういう着物を作らにゃいけんとう、着物を縫うわけですから、ミシンでダーッと。

捕虜の中には呉服屋や仕立屋もいた。彼らが晒し木綿で仕立てた着物に画家が絵を描くと立派な舞台衣装が完成したという。丁髷（ちょんまげ）や丸髷（まるまげ）のかつらは役者の頭に合った土台をボール紙で作っておき、その上にドンゴロス（麻製の米袋）から抜き取った糸を1本1本貼り付けて毛髪らしくみせ、全体を煙突の煤（すす）で黒く染めた。Y氏の記憶によれば演芸会は毎月1回、夜の7時半か8時に始まり、最初は現代劇で、次に音楽が入り、最後の時代劇が終演する頃には10時を回っていたという。若く美しい女が登場する芝居はもちろろん、やくざ者が老母に一目逢おうと苦勞して故郷に帰る物語など、母と息子の再会をテーマとした芝居にも絶大な人気があった。演芸会に使われる建物は「演芸場」と呼ばれるようになり、室内には花道が常設された。捕虜たちはドブクロを密造し花道の下に隠すなどして、日頃から演芸場に親しんだ。「女形」を演じた体験を話す間、Y氏は何度も大きな声で笑い転げては筆者を驚かせた。

Y氏：お化粧はねえ、（五月信子）一座におった人たちが1人2人おってねえ、みーんな、やってくれてたんです。

筆者：あ、ご自身でなさる必要はないんですね。

Y氏：顔を出すと、きれいに作ってくれよったわけ。

筆者：ご自分のお顔が段々変ってゆくところを、鏡で見られるわけですよ。

Y氏：そりゃあ、見えるわけ（嘔みしめるような低い笑い）。

筆者：どんな感じがしました？

Y氏：さあさあ、おいおいおいおい、女みたいなことになってるわ、おまえ、おかしいんじゃないか、これ。顔洗ったら取れるかーゆうたら、「おお、取れる取れる」って（笑う）。きれいにねえ、作ってくれよったわけ。

「女のような」と言われることが最大の屈辱（内田 2010: 175）となり得た時代に、仲間内とはいえ人前で化粧を施し「女形」を演じる気分は如何なるものであったろうか。捕虜になる前、戦地に立つY氏の手には銃剣があった。カウラ暴動で飛び出す際には自決用の野球バットを握りしめていた。だがバットだけが大破し、Y氏は掌を負傷するだけの軽傷で済んだ。マーチソンに移動させられた彼は、実質的に野球をやめて演芸の世界に入った。与えられた人生を「仕方がない」と諦観によって享受してきたY氏は、この時「女形」を演じることに引き換えに、腹を抱えて笑い、叫びを交えて素直に感情を吐露する解放感を手に入れたように思われる。「女形」を演じることは、これまでみずからの身体を律してきた「男らしさ」の呪縛をかなぐり捨てる作業だったかも知れない。

事件から68年近くが経過した2012年（平成24年）の春、当時の様子を語りながらY氏は時々思い出したように自分の掌を見つめていた。そこには1944年8月5日に突き刺さったままの野球バットの破片が今も入っているのだ。手術をすれば簡単に取れる破片だが、それは取らずに記念に取っておくつもりだと言ってY氏は穏やかに微笑んだ。

6. おわりに

捕虜収容所に関連した出来事のうち、誰もが笑って語れるエピソードは極めて数少ない。その点で、演芸会と「女形」の思い出は特異な事例と言える。むろん、事件から70年近い時の経過が元捕虜たちの心を徐々に癒し、彼らの負の記憶をノスタルジアに包んでいる可能性も否めない。しかしそれだけではあるまい。例えば捕虜第1号の酒巻和男は、敗戦からわずか4年後の1949年（昭和24年）の段階で早くも「陸軍の者も海軍の者も共に（女形に）笑い興じた」と懐かしげな視線で「女形」を振り返っている。

Bコンパウンドで野球に熱中したY氏は、暴動発生時には愛用の野球バットでみずからの命を絶つことを決意した。しかし結果的に彼は暴動を生き残り、次に送られた収容所では野球着の代わりにやわらかな着物を身に纏う道を選んだ。暴力が日常だった兵士たちにとって捕虜収容所での新しい日常は、葛藤と同時に「男らしさ」を身体化した自己に根源的な変容を生み出す体験だった。「女形」を演じることは、その転向を象徴する出来事であったと思われる。「女形」を演じた本人はもちろん、彼に化粧を施した者、着物を縫った者、かつらを作った者、大道具や照明を担当した者、そして観客に至るまで、演芸会に集ったすべての日本人捕虜は「女形」を通して、いわば男らしさの脱構築の体験を共有した。演芸会における「女形」は、捕虜たちにとってそれまでの価値観を脱ぎ捨てるための一種の通過儀礼であり、本人がそれを意識したか否かは別に、男らしさという名のマインドコントロールからみずからを解くための貴重なステップだったのではないだろうか。

註

1. 終戦前の日本で捕虜は一般に「俘虜」と称されたが、本稿では「捕虜」に統一する。
2. カウラ収容所初の日本人捕虜・高原希國（1920生～2009没。海軍一等飛行兵曹。捕虜としての偽名は高田一郎）による手記。本書には高原自身の戦争体験（ダーウィン空襲から捕虜生活、カウラ暴動、帰国まで）とその時々心理が綴られている。
3. 「女形」はアメリカ合衆国の戦争捕虜収容所でも活躍した。第二次世界大戦中に日本人捕虜第1号となった酒巻和男（元海軍少尉）は自伝の中で、「（1944年4月）二十九日の演芸会は盛大であった。女気のない荒くれた男ばかりのキャンプでは、女形に扮した役者の人気は圧倒的に捕虜たちの心を奪ひ、陸軍の者も海軍の者も共に笑い興じたのである」と記している（酒巻 1949: 139）。
4. Y氏は1919年生まれの前陸軍伍長。1939年岡山工兵連隊に入営、1943年3月に捕虜となりカウラに収容された。今回のインタビューは2011年7月14日、2012年2月8日、同7月28日にY氏の自宅で行なわれた（但し最終回のみ電話インタビュー）。筆者は1993年より日豪両国の複数のカウラ事件関係者への聞き取り調査を続けており、このテーマで既に2冊の著書がある。Y氏とは2004年開催のカウラ事件60周年記念式典（於・豪州カウラ市）で出会い、以来、公私にわたる交流を続けている。

引用・参考文献

- 一ノ瀬俊也 2009 『皇軍兵士の日常生活』 講談社現代新書。
- 内田雅克 2010 『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌にみる「ウィークネスフォビア」—』 明石書店。
- 上野千鶴子 1998 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社。
- 内海愛子 2005 『日本軍の捕虜政策』 青木書店。
- 加藤千香子・細谷実 2009 『暴力と戦争（ジェンダー史叢書第5巻）』 明石書店。
- 酒巻和男 1949 『捕虜第一号』 新潮社。
- 首藤基澄 2008 『「仕方がない」日本人』 和泉書院。
- セジウィック, イヴ・K（上原早苗・亀澤美由紀訳） 2001 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』 名古屋大学出版会。
- 高原希國 1987 『カウラ物語』 私家本。
- 戸田金一 2012 『国民学校物語』 文芸社。
- 中田整一 2010 『トレイシー 日本兵捕虜秘密尋問所』 講談社。
- 中村江里 2010 「日本陸軍に於ける男性性の構築」, 木本喜美子・貴堂嘉之 『ジェンダーと社会 男性史・軍隊・セクシュアリティ』 旬報社, pp.170-190。
- 前川直哉 2011 『男の絆』 筑摩書房。
- 松原俊二 1989 『学徒, 戦争, 捕虜—私のレイテ戦記』 開発社。

- 森木勝 1986 『カウラ出撃—生と死の軌跡』 今日の話題社.
- 山本武利 2001a 『日本兵捕虜は何をしゃべったか』 文春新書.
- 山本武利 2001b 『米軍による日本兵捕虜写真集』 青史出版.
- 若桑みどり 2005 『戦争とジェンダー—戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』 大月書店.
- Australian War Memorial HP “Cowra breakout” (read on 5-8-2012).
- Cowra Council HP “Cowra Prisoner of War Campsite” (read on 5-8-2012).
- Department of Defence, Government of Australia 1996 “Directorate of Prisoners of War and Internees 1939-51, Vol.1, Part 2” National Archives of Australia.
- Gordon, Harry 1994 “Voyage from Shame” University of Queensland Press.
- Hobson, David “The Cowra Breakout” ANZAC Day Commemoration Committee of Queensland Incorporated HP (read on 15-8-2012).
- Marriott, Joan (Editor) 1988 “Cowra on The Lachlan” Cowra Shire Council.
- National Archives of Australia HP “Cowra Breakout, 1944 – Fact sheet 198” (read on 5-8-2012).
- NSW Migration Heritage Centre HP “1941 Dunera Boys Hay Internment Camp Collection” (read on 26-8-2012).